
白の世界の贈り物の...

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の世界の贈り物の…

【Nコード】

N2935B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

ぼうつとしていたクリスマスに起きたのは、奇跡みたいなことだった

晴れていた。夏みたいな太陽が一日中街を照らしていた日。あたしは学校も冬休みに入ってやる事がなかったので、一日中ごろごろしていた。春先に現れる三毛猫みたいに日の照るベランダのガラス窓のあたりですっと目を閉じていた。

そのおかげで、正午をとくに過ぎた時間になってやっと身体を起こすと軽い目眩があたしを襲った。ついで身体がひどく重い。ちよつと病的だな、と思つてふらふらとリビングに行く朝早く仕事にでたお母さんが既に帰ってきて夕ご飯の支度をしていた。

「はつ、お母さん電話したらちゃんとしてよね？」

お母さんは何かをとんとん切りながら言つた。呟きにも似た声で、一瞬あたしに言っているかわからなかった。

「あ、ごめん。ずっと寝てた」

あたしはイスに座つてから、お母さんのほつを見て答える。

「もお。不健康なんだから」

お母さんは何かをなべにさらさら入れながら言つた。言つた瞬間にちいが帰つてきた。

ちい。あたしの弟。本名は千秋だから、あたしはちいと呼んでいる。今、中学生で、野球部のキャプテンとして頑張っている。もちろん、今日も練習があつたようで、どろくさいちいはカバンを放り投げると、「シャワー浴びてくる」と言つてまた消えた。

「健康すぎなんだから」

あたしは言つて、ちいの重たいカバンをリビングの隣の和室に持つていつてあげた。

あまり使われていない和室はものぐさ一家のあたしたちの物置状態だった。あたしの教科書や漫画―むしろ主に漫画―の入つた通学の力バンとかお母さんの仕事に使うカバンなども置いてある。そして部屋の隅っこには何故か家族のケータイの充電器がまとめておい

てあつて、あたしたちは何故かみんなそこで充電をする。だけど四台そろつと小さな家族がもう一つ出来るのは嫌いじゃなかった。あたしはただいま、とちいのカバンからケータイを取り出してその中に戻した。これで残すところお父さんのケータイのみ。

そのうちの一台がぴかぴかとひかっていた。あたしのケータイだった。小さなランプの青いひかり。着信をお知らせする色だ。

「お母さんケータイにもかけたの？」

あたしはそれを開いて、リビングに向かって聞いた。

「だつて家にかけても出ないんだもん」

お母さんはまた、振り返らないで答えた。あたしのケータイに大きく、『お母さん』という文字と番号が浮かぶ。イスに戻つてそれをぼうつと眺めたら、他にもう一件かかつてきていることに気がついた。

けいた。ケータイはそう表示した。同じ学校の同じクラスの男の子。去年の暮れからあたしたちは付き合っていて、もうすぐ付き合つて一年だった。けれど最近はずとなのかうっかりなのか全く連絡を取っていなくて、お互いに様子を遠くから伺う―あたしは親友の美衣子に探ってもらつて、けいたは他のクラスの人を介して、だけれどほぼダイレクトにあたしに聞いてくる―状態だった。最近よく一年前に同じクラスだったけど殆んど話したことのない男の子から「けいたつてさあ……」

で始まる質問を何度も聞かれる。

そんなけいたからの電話だったので、正直焦った。休みののはほとんどゆつたりした空気が突然変わったような気がした。

あたしはまず、美衣子に相談しようかと迷つてから、急にそれがめんどろに感じて、けいたに電話をした。昔は三回以内ででてくれたのに五回コールしてもけいたは電話にでなくて、別れ話でもするんだろつな、と目を瞑りたくなるような、ならないような気分が覆われた。

「あ、もしもし……」

けいたは結局十五回目のコールで今やっと気づきました、って声で電話に出てきた。本当は出るかどうか迷ってたんだろう。

「どうしたの？」

あたしは出来るだけ冷たくも温かくもない声で聞いた。

「ん…、えつとさ…。今日、今から会えない？」

ひどくゆったりとけいたはそう言った。あたしはさつきよりもよりちよつと目を瞑りたくなった。

「めんどくさい。わざわざフラれに行かなきゃなんて。

その時点で、あたしの頭の中でけいたの用件は『別れ話』ということに完全にシフトしてしまっていた。声色、行動、息遣い。好きになった相手だからそういう細かいことで、相手の思っていることがわかってしまうのだ。あたしはもうどうでもよい気分で、仕方なく和室にかけてあるダウンジャケットを着た。

「お母さん、ちよつと友だちと会ってくる。すぐ帰ってくるから夕飯作っておいてね」

意外にも笑えたのはキッチンからあたしの好きなシーフードカレーの匂いがしてきたからだ。あたしはもうそれだけを生きる楽しみのように考えて、玄関の扉を開けた。

太陽のわりに外の世界は冷たかった。あたしはマフラーを持っていこうかと思つてから、何かを期待して結局そのまま待ち合わせ場所に指定された公園へ向かった。ありきたりな場所だな、と思いいながら捨て台詞と行動を考えようか、まずそこで迷っていた。

やがて葛藤したまま、あたしは公園についてしまった。その中央にあるベンチにけいたの姿を見つけると、結局頭の中は真っ白になつてしまった。なにをを考えても無駄だったらしい。ドキドキがあたしを支配していた。起きたときとはちよつと違う目眩があたしの足をふらつかせて、けいたの前で見たことがないくらいだらしなく、隣に腰を下ろした。

「久しぶり」

けいたは言つて、『あつたかい』の缶コーヒーを一つあたしにく

れた。変なところに気を使っただな、と思う余裕もなくそれを何と
か受け取って「あつ」と元氣なく言った。

「あのさ、俺。葉摘^{はづみ}に言いたいことがあるんだ」

けいたはもう一つの、自分のコーヒーを一口飲んで白い息と共にそ
う言った。あたしはもう（ぎゅっではなくて）ぎゅっと目を閉じた
くなった。

「葉摘…うまく言えないんだけど…これからも、よろしく」

「え？」

あたしは拍子抜けして変な声で言ってしまった。まさか、そうくる
なんて。

「嫌いじゃ…ないよな？」

あたしは恐る恐るそう聞かれて、けいたの友だちに聞かれた質問に
ほぼ全て、「いいんじゃないのぉ」で答えていたことを思い出した。
そのときはどうでもいい、という意味を込めた「いいんじゃないの
ぉ」だった。けれど実際にけいたを前にしてそんなことを言われて
しまったあたしはそれはもう昼寝をしている三毛猫よりも弱くて、
頷くのには時間はいらなかった。

「うん、嫌いじゃないよ。嫌いなわけ、ないじゃん」

結局あたしはこういう人なんだなあ、と漠然に思ったけど、重ねた
けいたの手がコーヒーのおかげで温かくてそれもすぐに忘れてしま
った。

あたしたちはしばらくそのコーヒーの温かさを互いに味わった。

「そういえばさ、明後日で俺たちは付き合って一年なんだよね」

けいたはすっかり暗さを持ってきた空をふんわり眺めて、そう言っ
た。十二月二十六日。あと一日早かったらなあ、と二人で言ってい
たクリスマス後のあたしたち。今と同じように寒い中外で手を繋い
で歩いていた。そして、けいたは突然、自分のマフラーをあたしの
首に巻いてくれた。家を出てきたときには儚い願いだっただそれも、
一年前と同じだった。

「あのさ、俺、ちよっと早いけどプレゼントがあるんだ」

「これ、してくれただけで十分だよ？」

あたしはマフラーを指して言った。一年の記念も、クリスマスプレゼントもけいたの優しさだけで十分だった。

「でも、今…っていうか明日なんだけど、そのプレゼントも残るよ
うなモノじゃないからさ」

けいたは苦笑いして言ってから、立ち上がった。そして、天を指して
「一番星、見える？」

と聞いてきた。ちょうど、オレンジと薄暗い青のグラデーションの
真ん中に、確かに一つ星が見えた。

「うん、見えるよ」

あたしが言つと、けいたは何を思ったか、神に許しを請うように目
を閉じて強く強く祈りを捧げた。はたから見たら可笑しいだろうけ
ど、それすらかつこよく見えたのはあたしが素直にあたしであるか
らだ。

「今、あの星に願いを捧げた。明日、十二月二十五日はきっとホワ
イトクリスマスになるよ」

「え？」

今度は落ち着いた声で言えたけれど、驚いた。あたしへのプレゼン
ト。それは生まれてから初めてホワイトクリスマス、…らしい。

「本当に雪が降るの？」

「うん」

「うそだあ？」

「ほんとだつて」

「でも今日すごく晴れたのに」

「…ラヴパワーだよ」

「さすがだね」

「だろ？」

次の日。雪が降った。世界は銀色で覆われている。完璧なまでの
ホワイトクリスマスだった。あたしはけいたを尊敬するくらいすご

いと思った。

「姉ちゃん、昨日の特番録画した？」

窓の外を見て子どもみたいにはしゃいでいたあたしにちいが言った。

「歌のやつ？」

あたしが言いながら窓を開けると、ちいが「そう」と言いながら窓を閉めた。

「明日は全国的に雪。各地でホワイトクリスマスになるでしょう」ちいが録画した番組を再生するのを耳だけで見ていたら、急にそんな声が聞こえていた。どうやら番組が始まる前に、昨日のニュースを少しだけ録画してしまったようだ。くるっと振り返ると、画面の中のアたしたちの街のある辺りは十二月二十五日の降水確率が九十パーセントだった。そこでやっつけいたのトリックがわかった。ただ、けいたは天気予報をしていただけなのだ。

「そう。葉摘さ、電話に出ないなんてことないからさ、寝てるんだなあって。んで、寝てるってコトは、天気予報見てないだろうなって。半分は賭けだったけど、うまくいったみたい」

寝てるとはつきり言ったわけでもないのに、全てを信じてくれていたけいたに、あたしは涙が零れそうになるくらいに嬉しくなった。そして変に疑っていたあたしに鋭く後悔した。

「ゴメンね。ありがとう」

そんなあたしの気持ちまではわかっていないであろうけいたには伝わらないけどそう小さく謝って、お礼を言った。

「いいよ、なんでも。それより今日はどこ行こうかあ……」

適当だけどしつかり温かい返事だった。そしてまた、一年前と変わらない会話をしてから、あたしたちは真っ白になった公園でデートをすることにした。

「マフラーしないと風邪引くよ？」

ちいは玄関であたしにそう言った。あたしはもちろん、そのまま外へ出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2935b/>

白の世界の贈り物の...

2010年11月12日21時16分発行